

学習評価について

学習評価の考え方

高等学校における学習指導要領の改訂に伴い、学習評価の充実が求められている。高等学校では、従前から観点別学習状況の評価が求められていたが、評価となれば、ペーパーテストに平常点を加えて点数を出し、それを評定に変換していた実態がある。そこで、平成 30 年（2018 年）告示の高等学校学習指導要領改訂を踏まえて、学習評価の改善の重要性が指摘された。

1. 学習評価とは

学習評価とは、授業での指導が生徒に的確に行われ、生徒が着実に目標に向かって学力を向上させ、生徒自らが学びを振り返り、次の学びにつなげられるように、主体的に学習に取り組む状況を作り出しているかなどを判断するために学習評価が存在する。学習評価についてまとめると、大きく次の 3 点に集約される。

- ①学習の目標に対して、生徒がどの程度まで達しているかを判断するもの
- ②学習の目標に達するために必要な手立てを導き出すもの
- ③教師の指導の在り方を再確認するもの

これらを的確に判断するためには、生徒個々をさまざまな観点から分析していくことが求められる。単純に定期考査でのペーパーテストだけで判断し、評価することは無謀と言っても過言ではない。そこで再度強く求められているものが、観点別学習状況の評価である。

学習評価は、「観点別学習状況の評価」と「評定」によって行われる。ここで、「観点別学習状況の評価」と「評定」で示しきれない生徒 1 人 1 人のよい点や可能性、進歩の状況については、「個人内評価」を用いることになる。

2. 「観点別学習状況の評価」について

「観点別学習状況の評価」とは、普段の授業の中で、指導によって生徒がどのような状況にあるのかを、さまざまな面から評価していくことである。ここでいう面が観点である。そのために、指導と評価の一体化から、目標に沿った指導を行い、その結果として生徒の状況を判断する。そして、これらの評価により、どの観点が望ましい学習状況になっているのか、どの観点到課題があるのかが明確になり、それ以降の具体的な指導の在り方が明白になる。また、生徒個々にも、学習方法を指摘するなど、指導や生徒の主体的な学習方法の改善に生かすことができる。

「観点別学習状況の評価」を行うためには、観点ごとに評価規準を学校や教師が定めることになる。評価規準とは、「観点別学習状況の評価」を的確に行うために、目標の実現状況を判断するよりどころとなるものである。

そして、学期末などに学習の記録として、観点別学習状況を観点ごとに記入していくことになる。その際、3 つに区別して記入する。

- ・「十分満足できる」状況と判断されるもの：A
- ・「おおむね満足できる」状況と判断されるもの：B
- ・「努力を要する」状況と判断されるもの：C

3. 「評定」について

「評定」とは、年度末に、分析的な評価としての「観点別学習状況の評価」を基に、最終的な目標の実現状況を一括してまとめたものである。総括方法は、各学校で適切に決定することとなっている。評定は、以下の 5 つで区別される。

- ・「十分満足できるもののうち、特に程度が高い」状況と判断されるもの：5
- ・「十分満足できる」状況と判断されるもの：4
- ・「おおむね満足できる」状況と判断されるもの：3
- ・「努力を要する」状況と判断されるもの：2
- ・「努力を要すると判断されるもののうち、特に程度が低い」状況と判断されるもの：1

4. 「個人内評価」について

「個人内評価」（形成的な評価）とは、学習指導要領の目標や各学校で定める評価規準に含まれないもの、学習評価に直接関わらない生徒のよい点や可能性、進歩の状況（よく挙手をする、宿題を忘れない、他生徒への思いやりが深い、教師の手伝いをよくする、大きな声で発話するなど）のことで、これらは、観点別学習状況の評価や評定に加えることはできない。

5. 学習評価の一連の流れ

学習評価の一連の流れは、以下の通りである。

- ①目標に沿った指導
- ②各単元内での観点別評価（a, b, c）
- ③学期ごとの観点別評価（A, B, C：②を総括）
- ④学年末の観点別評価（A, B, C：③を総括）
- ⑤評定（5, 4, 3, 2, 1：④を総括）、個人内評価（指導要録に記載）

以上の流れで生徒個々を評価するが、②、③、④の後などに、生徒の学習改善のために、これらの評価を生徒にフィードバックすることは重要なことである。

※適正な評価を行うためには、次の事柄が重要である。

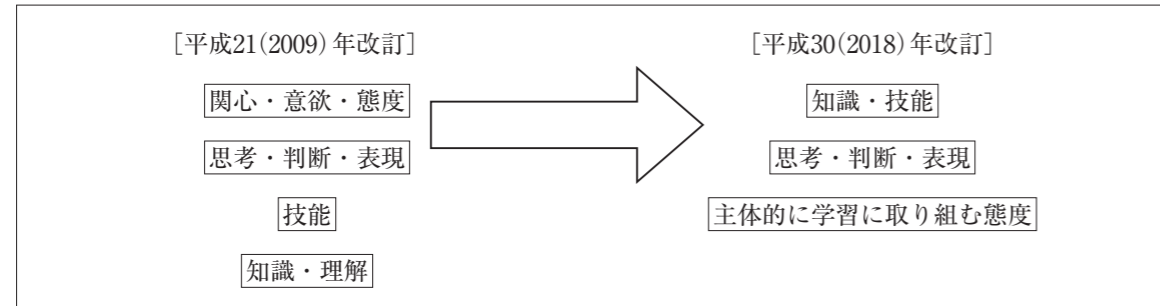
- (1) 生徒の適格な状況を判断して年間目標を設定する。
- (2) 年間目標に沿って、年間の評価規準を作成する。
- (3) 年間指導計画を作成する。
- (4) (CAN-DO リストを作成する。)
- (5) 各単元の目標と評価規準を作成する。
- (6) 目標を達成するために指導を行う。
- (7) 常に指導と評価の一体化を考える。
- (8) 目標及び評価規準が適正か振り返る。

具体的な学習評価の在り方

1. 観点別学習状況の評価の観点について

学習評価としての観点別学習状況の評価を行うためには、評価規準を作成する必要がある。その際、生徒の学習状況を分析的に捉えるものが、評価の観点となる。

【学習評価のための観点を改善】



これらを比較すると、平成21年改訂の観点では、「知識・理解」と「技能」とが2つに分かれていたが、平成30年改訂からは、それらが1つに合体して、「知識・技能」となった。これらは、基本的には別物ではあるが、関連性が強いことにより、1つにまとめられている。また、平成21年の「関心・意欲・態度」の表記では曖昧模糊としていたことから、内容が更に明確になるように「主体的に学習に取り組む態度」と改めている。これらは、評価を更に充実したものとするための改善策でもある。

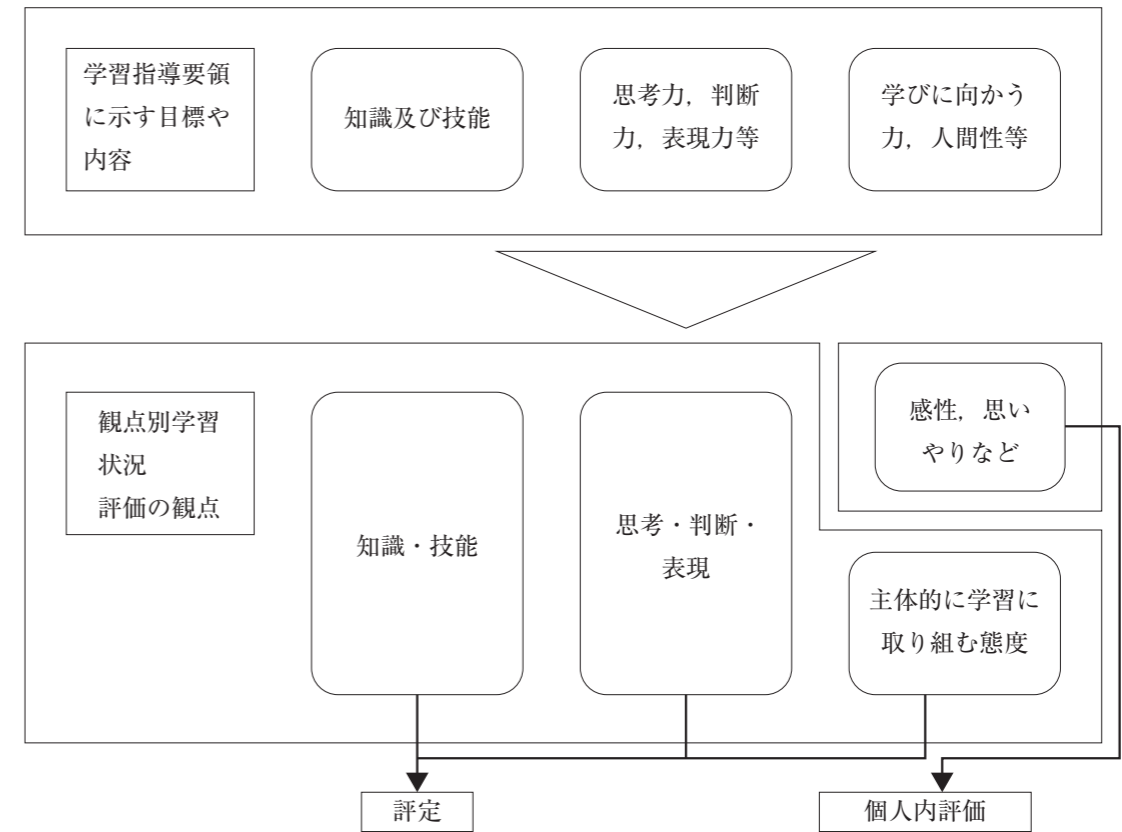
2. 指導要録の記入について

各教科・科目等の学習の記録													
各教科・科目等		第1学年			第2学年			第3学年			第4学年		
		学 習 点 状 況	観 点 別 状 況	評 定	修 得 単 位 数	学 習 点 状 況	観 点 別 状 況	評 定	修 得 単 位 数	学 習 点 状 況	観 点 別 状 況	評 定	修 得 単 位 数
教科等	科目等												
各 学 科	外 国 語	英語コミュニケーション]	ABA	4	2								

※観点別学習状況の欄にABAとあるのは、左から「知識・技能」がA、「思考・判断・表現」がB、「主体的に学習に取り組む態度」がAをそれぞれ表している。

3. 観点別学習状況の観点

文部科学省・国立教育政策研究所の「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料によると、以下ようになる。



4. 評価規準の内容と文言(例)

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
内容のまとめり(領域)	<知識> ～知っている。 ～理解している。 <技能> ～技能を身に付けている。	～している	～しようとしている。

5. 授業内評価の実際の進め方

(1) 普段の授業(単元別)の中で、言語活動やパフォーマンステスト、小テストやペーパーテスト、期末考査などを、内容のまとめりごとに3つの観点に分け、「a = 十分満足できる」、「b = おおむね満足できる」、「c = 努力を要する」の3段階で評価する。その際、3段階の評価の基準を事前に設定しておく必要がある。時には、生徒にその基準を周知し、パフォーマンステストやペーパーテストに主体的に関わるようにする。たとえば、「話すこと[発表]」の活動観察の中で、「知識・技能」を評価する基準は以下のようなものがある。

＜評価の基準＞ 以下の基準で評価する。

- (観察による)・スムーズに発表を行っている……………a
- ・おおむね発表を行っている……………b
- ・発表が成り立っていない……………c

これを、下の一覧表に記載していく。

	活動観察		パフォーマンス テスト	「話すこと [発表]」評価	他の領域 の評価	学期末の 観点別評価
	単元1	単元2				
知識・技能	a	a	b	a	(a～c)	(A～C)
思考・判断・表現	a	a	a	a	(a～c)	(A～C)
主体的に学習に 取り組む態度	b	a	b	b	(a～c)	(A～C)

(2)たとえば、上記の表のように、学期内に活動観察2回とパフォーマンステスト1回の計3回の発表を評価する場面があり、「知識・技能」の観点ではaabの評価をし、「思考・判断・表現」の観点ではaaaの評価をしている。また、「主体的に学習に取り組む態度」の観点ではbabの評価をしている。これを学期末に、「話すこと [発表]」の評価として観点ごとに総括することになる。総括の方法は以下の2つの方法が考えられる。

①たとえば、a = 3点、b = 2点、c = 1点と数値化する方法である。この場合、3度の評価場面があることから、3点～9点に分布する。それを、a : 8点以上、b : 5～7点、c : 3点および4点と定める。すると、「話すこと [発表]」の「知識・技能」はaabから8点となり、結果、aと総括される。同じように、「思考・判断・表現」はaaaから9点でa、「主体的に学習に取り組む態度」はbabから7点でbとなる。これらのルールは、各学校で定めることになる。

②2つ目は、a、b、cの数の比率で判断する方法である。たとえば、3度の評価場面があった場合、以下のルールを定める。

- ・aaa = a (すべてaの場合)
- ・aab = a (aの数が多いことから)
- ・aac = a (aの数が多いことから)
- ・abb = b (bの数が多いことから)
- ・abc = b (aとcが相殺される)
- ・acc = c (cの数が多いことから。ただし、a評価の重要度からbも考えられる)
- ・bbb = b (すべてbの場合)
- ・bbc = b (bの数が多いことから)
- ・bcc = c (cの数が多いことから)
- ・ccc = c (すべてcの場合)

このような判断のルールも、各学校で定めることになる。

なお、例として示している3回の評価は、活動観察が2回、パフォーマンステストが1回である。これらの評価は重要度を並列に考えることができるかどうかである。パフォーマンステストの準備も発表にも時間をかけて、じっくり取り組ませていたとしたら、このパフォーマンステストの評価の度合いを高くすることも考えられる。たとえば、数値の場合には、a = 5点、b = 3点、c = 1点などである。また、数の比率の場合パフォーマンステストの部分がaで、bbaの結果が出たとしても、総括はaにするルールを適用することも考えられる。ここでも、指導と評価の一体化から、教師がしっかりと戦略と戦術をもって対応することである。

6. 学期末評価の実際を進め方

学期末には、それまでの内容のまとめりに得られた結果を一覧表にまとめる。そして、観点ごとに総括して、学期末の観点別評価を出す。たとえば、以下の通りである。

	聞くこと	読むこと	話すこと [やり取り]	話すこと [発表]	書くこと	学期末の 観点別評価
知識・技能	a	a	b	a	a	A
思考・判断・表現	b	b	b	b	b	B
主体的に学習に 取り組む態度	b	b	b	b	b	A

学期末の評価は、それまでの授業での内容のまとめり別の評価（ここでは、aabaaなど）を総括し、観点別評価「A = 十分満足できる」「B = おおむね満足できる」「C = 努力を要する」で表す。

「A」「B」「C」へ総括するルールも、各学校であらかじめ決めておく。たとえば、a = 3点、b = 2点、c = 1点と数値に置き換えて、5つの領域を合計5～15点の範囲でルールを定める。例えば、合計点が12点以上ならA、11～8点はB、7点以下はCなどと数値で総括する場合と、5(2)の②と同様にaababの場合をA、aabbbの場合をBなど、数の比率で総括する場合とが考えられる。

7. 学期末評価の実際を進め方

各学期に総括された観点別評価を、更にそれらを総括して、学年末の観点別評価とする。次の一覧表は、3学期制を想定してまとめている。学校によっては2学期制や4学期制のところもあり、それにより総括する。

	1学期 観点別評価	2学期 観点別評価	3学期 観点別評価	学年末の 観点別評価
知識・技能	A	B	B	B
思考・判断・表現	B	A	A	A
主体的に学習に取り組む態度	A	A	A	A

ここでも、数値化して総括する場合と、数の比率で総括する場合とが考えられる。しかし、3学期制を例に取れば、3学期は期間も短く、授業時間もほかの学期より少なくなっている。定期テストの回数も少ないことが考えられる。そこで、3学期の度合いを減らすことも考えられる。たとえば、A = 3点、B = 2点、C = 1点としていたものを、3学期は、A = 2点、B = 1点、C = 0点として、2～8点の範囲で学年末の観点別評価を判断することにする。そこで、Aを7点以上、Bを4～6点、Cを2点および3点などと定める。一方、3学期全てを、A = 3点、B = 2点、C = 1点とした場合には、学期末の観点別評価は3～9点で判断する。最終的な学年末の観点別評価は、Aは8点以上、Bは5～7点、Cは3点及び4点とする。

上記のルールにしたがって、具体的に見ていく。

- ・(学期を並列に評価した場合、1学期から順に) ABB = 7点 (学期末の観点別評価 : B)

以下、同じように考えると、

- ・(学期を並列に見た場合) ABC = 6点 (B)
- ・(3学期のみ減らす場合) ABC = 5点 (B)
- ・(学期を並列に見た場合) ACC = 5点 (B)
- ・(3学期のみ減らす場合) ACC = 4点 (B)

- ・(学期を並列に見た場合) CCA = 5点 (B)
- ・(3学期のみ減らす場合) CCA = 4点 (B)

以上から、どちらの場合でも、このルールにしたがうと、揺れがないことがわかる。

また、数の比率で判断する場合にも、3学期の度合いを減らすことも考えられる。

8. 評定への総括について

高等学校生徒指導要録の様式2(指導に関する記録)の各教科・科目等の学習の記録に、これまでの観点別学習状況と評定を記載することになる。観点別評価はA、B、Cの3段階である。それを5段階の評定に総括するのである。もう一度、それぞれの評価と評定の区分を確認する。

○観点別学習状況の評価

- A: 十分満足できる
- B: おおむね満足できる
- C: 努力を要する

○評定

- 5: 十分満足できるもののうち、特に程度が高い
- 4: 十分満足できる
- 3: おおむね満足できる
- 2: 努力を要する
- 1: 努力を要すると判断されるもののうち、特に程度が低い

どのように観点別学習状況の評価を評定に総括するかである。もちろん、これも学校でルールを定める必要がある。たとえば、数値化するとしたら、ここでも、A = 3点、B = 2点、C = 1点として、3~9点を5段階に振り分ける。評定5 = 9点、4 = 7点および8点、3 = 6点、2 = 4点および5点、C = 3点とすることも考えられる。一方、数の比率で評定に総括する場合には、点数は無視して個数によるルールを定める。たとえば、以下ようになる。

- ・AAA = 9点⇒5
- ・AAB = 8点⇒4
- ・AAC = 7点⇒4
- ・ABB = 7点⇒4
- ・ABC = 6点⇒3
- ・BBB = 6点⇒3
- ・ACC = 5点⇒2
- ・BBC = 5点⇒2
- ・BCC = 4点⇒2
- ・CCC = 3点⇒1

なお、これらは例であって、学校によっては、AABを5とする場合や、ABBを3とする場合も考えられる。

【参照】

『ペーパーテスト&パフォーマンステスト例が満載! 高等学校外国語新3観点の学習評価完全ガイドブック』菅正隆・松下信之(明治図書出版 2022年2月)

※数多くの事例(パフォーマンステスト、ペーパーテスト、それに関する評価事例)等が詳細に載せられており、普段の授業の参考となる。